

源 影 面 (下)

吉 野 忠

(教育学部国語研究室)

On Minamoto-no-Kagetomo (2)

by

YOSINO Tadaki

(上) 目次 (第17巻人文科学第11号)

序 1名まえ 2生涯 3著作 4采藻編

5 古今和歌集もとのところ

「国書総目録」に、「古今和歌集序もとのところ」として、写本2部(大阪市立大学本・東北大学本)と版本1部(旧下郷文庫本=戦災焼失)とを登載している。そして、明和6年刊とある。版本を今見ることができないことは残念である。2写本とも古今和歌集の序の研究である。

大阪市立大学本(森文庫911, 135MIN)は、表紙には「古今和歌集舊意」とあり、内題は「古今和歌集もとのところ」である。終りに、「こひざらめかも」の注につづけて、

一篇九章四十七句。序よりはたまきこれを注して古今和歌集舊のころと名づく。いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむといふ歌の詞をとれり宝暦十一年五月一日源影面しるす(下線筆者)

とある。内題の下には著者名はない。かなの序の注だけである。ごくいいねいな写しである。句読点(。)もついている。本文34丁。1面10行。1行22~25字ぐらい。

東北大学本(狩野文庫4, 10505)は、渡辺文庫・成沢氏の蔵書印を有するもので、表紙には「古今集序もとの心 完」とあり、内には、

古今和歌集序もとのところ

源 影面 著

とある。かなの序の注のあとに大阪市立大学本にある上記のことばはなく、次に真名序があり、それに傍注頭書がついている。そのあとに、次の奥書を有する。

此書はきぬ屋の大人よりかりうけうつし畢ぬ大人かたり給ふは此序の考年ひさしく考置けるか相模の国にし遊へる時ふと得たりけるまゝをのれか草稿をやきて是もて人に伝んとするといふ玉ふ実には有難き心にそ有ける是によりてその言をすゑに書しるし侍りぬ

文化十一きのへいぬのとし神無月廿一日に

雷盆堂雷木子写也

この本は草写であり、句読点はついていない。かなの序注22丁、1面14~16行(15行が基準か)、1行21~25字ぐらい。真名序と奥書で3丁。

以下、大阪市立大学本は「市大本」、東北大学本は「狩野本」と称することにする。

市大本と狩野本と対照してみると、相当相違がある。

まず、狩野本には、「契冲云」(余材抄による)「本居宣長ハ」「三井高蔭かいふ」(この2つは遠鏡による)「雷木子按るに」「直賢言」「真恒いふ」「真恒云」「真恒の考に」が見えるが、これらはすべて市大本にはない。その内容に当たるものもない。

狩野本の書写者雷木子も、奥書に見える「きぬ屋」も不明であるが、きぬ屋の大人がこの親本を相模で得たということを手がかりに想像すると、直賢は、「采藻編」作者である相州子易大明神の社司藤原直賢ではあるまいかと思われる。もし、この想像が当たっているとすれば、その親本は、影面の門人直賢らの手を経たものである。

次に、文面を対照すると、狩野本は草稿本の系統で、市大本は整理本の系統かと思われる。

① 市大本には句読点・濁点があるが、狩野本にはない。

② 市大本は、内題が「古今和歌集もとのこゝろ」で、最初に「序」の説明があってから、「やまとうたはひとのこゝろを……」となるが、狩野本の内題は「古今和歌集序もとのこゝろ」であり、「序」の説明はない。

③ 注には、前後したり、ことばに小異のあることが多く、さらに一方にあって他にないものもある。ことばだけの対校ではずいぶんちがっているが、趣旨はだいたい同じである。そして、狩野本系の本が改められて、市大本のようになって見えてよいようである。

この誓の書名のもとづくところは、市大本の終り（上に引用）に言っている。「もとのこゝろ」の文字は、両本ともかな書きであるが、市大本の終りには「舊のこゝろ」としてあり、「古今和歌助辞分類」の序やその1本に付した著述目録（本稿上べ10所引）には、「舊情」と書いている。いずれも古誓の古意を明かにするの意であるが、真淵の「百人一首古説」や「伊勢物語古意」（もと「伊勢物語古説」といったか^(註1)）にならったものかと思われる。

次に、この誓は序だけの研究か、歌の注もあつたのかの問題がある。両伝本とも序だけである。内題は、狩野本は「序もとのこゝろ」であるが、市大本は「もとのこゝろ」である。そして、市大本の終りには、歌注もあるように書いてある。しかし、歌の注が存在したことを聞かない。市大本のようなことばは、まだ歌注はできあがっていないが、これからやってゆこうとするときに書くこともあるようである。だが、「古今和歌助辞分類」の序に

源影面師。古今和歌集もとのこゝろを著はしけるに、かの集に出たるてにをはの分類、上下二まきを為せりける。其旧情より先にと。これをおもふどちの為に。おのれ請て梓になん鏝めける。

とあって、その誓は「古今和歌集もとのこゝろ」著作から派生したものとしており、また、同誓の説明の中に、

委ハ本集に、わか草のつまもこもれりといふ歌に日本紀万葉を引て注せり。

ということばも見え、また、「百人一首歌のこゝろ」に、古今集の左注について「もとの意に委くしぬ」と言っている。そうすると、歌注もあつたが、伝わらなかったことになる。

この誓の著作年代は、市大本の終りのことばによって、宝暦11年ということになる（少なくとも序注は）。（ただし、後に論ずる）

本文批評

古今集かなの序にある細注の歌が後人のものであることは、契沖も言っている。荷田春満は、さらに本文にも後人の加筆があると言ひ、賀茂真淵は、その説をうけて、次のような個所を、貫之の筆でないとして、削除した。

奈良の御時よりひろまりける。かの御世や哥の心をしろしめしたりけん。かの御時におほきみつのくらゐ、

是は君も人も身をあはせたるといふ成へし。秋の夕……雲かとのみなんおほえける。

○是よりさきの哥を集めてなん万葉集と名付たりける。

○かの御時よりこのかた……人多からず。

よめる哥多く聞えねば此彼を通はしてよくしらず。

○古への衣通姫の流なり。

つよからぬは女の哥なれば成へし。

これらのうち数項(○のついたもの)は真名序にならって加えたとしている。また、六義の説も後人のものだろうと言った。これらを後人の筆とする理由は、事がらが歴史に反するという、文章のまずいことであった(続万葉論)。

影面は、真淵の行き方をうけて、さらに数歩を進め、いたるところに大ナタをふるった。かれが貫之の筆と認定したのは、次のようなものである。かれのわかづ章の番号と「句」数とを、各章の終りに付記する。市大本と狩野本とで句数のちがうところがあるが、章句と章番号は同じである(狩野本の明らかな誤脱と文字づかいの相違とを除いては)。

やまとうたはひとのこゝろをたねとして。よろづのことはとぞなれりける。(以上二句首章)(狩野本一句)

ちからをもいれずしてあめつちをうこかし。目に見えぬおにかみをもあはれとおもはせ。をとこ女の中をもやはらげ。たけきものゝふのこゝろをもなぐさむるはうたなり。(以上四句第二章)

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ。霞をあはれみ露をかなしむこゝろこと葉おほくさまさまになりける。(以上二句第三章)(狩野本一句)

しかあるのみにあらずさゞれ石にたとへつくば山にかけて君をねがひ。よろこび身にすぎたのしみ心にあまり。ふしの煙によそへて人をこひ松むしのねに友をしのび。高さご住の江の松もあひおひのやうにおぼえ。をとこ山のむかしを思ひ出てをみなへしの一時をくねるにも哥をいひてぞなぐさめける。(以上五句第四章)(注2)

又春のあしたに花のちるを見秋の夕ぐれに木の葉の落るをきゝ。あるはとしことにかゝみのかけに見ゆる雪と浪とをなげき。草の露水のあわを見てわか身をおどろき。あるはきのふはさかえをごりて時を失ひ世にわびしたしかりしもうとくなり。あるは松山のなみをかけ野中の水をくみ。秋はぎの下葉をながめあかつきのしぎのはねがきをかせへ。あるはくれ竹のふきふしを人にいひよしの川をひきて世中をうらみ来つるに。今はふじの山も煙たゞずなりながらのはしもつくる世ときくひとは哥にのみぞこゝろをなぐさめける。(以上八句第五章)

いにしへよりかくつたはるうちにもかきのもとの人まろなん哥のひじりなりける。又やまべの赤人といふ人ありけり。此人々をおきて又すぐれたる人もくれ竹のよゝに聞え。かたいとのよりよりにたえずぞありける。(以上四句第六章)

かゝるに今

すべらぎのあまねきおほんうつくしみのなみやしまのほかまでながれ。ひろきおほんめぐみのかげつくば山のふもとよりもしげくおはしまして。よろづのまつりごとをきこしめすいとまもろもろのことをすて給はぬあまりに。今も見そなはし後の世にもつたはれとて延喜五年四月十八日に大内記紀友則御書所のあづかり紀貫之前甲斐のさうくわん凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて万葉集にいらぬふるき哥〔それよりこのかた〕みつからのをも奉らしめ給ひてなん。それか中にも梅をかさすより始めてほとゝぎすをきゝ紅葉をゝり雪を見るにいたるまで。またつるかめにつけて君をおもひ人をもいはひ。あきはぎ夏草を見てつまをこひ。あふさか山にいたりてたむけをいのり。あるは春夏秋冬にもいらぬくさくさのうたをなん撰はせ給ひける。すべてちうたはたまきなづけて古今和歌集といふ。(以上十二句第七章)(狩野本十二句)

それ枕詞ははるの花にほひすくなくしてむなしき名のみ。秋のよのながきをかこてれば且は人の耳におそり且は哥のこゝろにはちおもへど。たなびく雲のたちみなく鹿のおきふし。つらゆきらが此世と同じくうまれて此ことの時にあへるをなんよろこびぬる。(以上四句第八章)

人まろなくなりたれど哥のこととゞまれるかな。たとひ時うつりことさりたのしみかなしみゆきかふとも此哥のもし有をや。あをやぎのいとたえず松の葉のちりうせずつして。まさきのかづらながくつたはり鳥のあと久しくとゞまれらは。哥のさまをもしりことのこゝろをもえたらん人は大空の月を見るが如くに。いにしへをあふぎいまをこびざらめかも。(以上六句第九章)

(市大本による)

以上9章47句よりなるとするのである。第7章の〔それよりこのかた〕は狩野本にあり、市大本に

はないが、両本とも注に、脱落であろうとしている。

文章がずいぶん短くなり、すっきりしてきたとは言えるかもしれないが、味がうすくなった難がある。ことに、第三章のはじめの「かくて」はおちつかないと思う。文章としてはともかく、貫之の原文がこれだというのは、もちろん行き過ぎである。

削除部分については、△をつけて削除文をあげそれぞれ後人の筆と断ずる理由を述べているが、それをだいたいまとめてみると、次のようなことである。例は一節のはじめの数語、あるいは該当の語をあげた。また、いくつもの例のうち1～数例を示すにとどめた。

- ① 貫之の文章と判定せられる(大井川和歌序を講究して知る)ものと違却する。(此歌あめつちの)(ここにいにしへの)(えたとるところえぬところ)(土佐日記の「ただこと」とちがう)
- ② 歴史や万葉集とたがう。(神世には)(あさか山の)(これよりさきの歌)(かの御時より)
- ③ 意味が重疊する。(世中にある)(いにしへのことをも)
- ④ 語が重疊する。(あめつちのひらけ)(おひのほれる如くに——如く)(ならの御時よりそ)(其外に——其名)
- ⑤ 用語が妥当でない。(つちにしては)(手ならふ)(あるは花をおもふとて)(宇治山)(たしかならず)(流れ)
- ⑥ 文の構成がまずい。(あめにしては)
- ⑦ 注語である。(——なるへし)(——けん)(六義の例歌)
- ⑧ 二説の間をつないだものである。(そのはじめを)
- ⑨ 俗である。(世中にある)
- ⑩ 君子のことばでない。(六歌仙評)
- ⑪ 社会常識に反する。(「おほささきのみかと」と御諱を直書。)(「さかしおろかなりと……」と下の者が上の失をあげて対句にしている)
- ⑫ わかりきったことである。(つよからぬは)
- ⑬ 真名序にかなえるために後人が補った。(花になく)(六義)(歌にあやしくたへなりけり)〔多数〕真名序によって前文を注したもの(世中にある)・真名序をうつして、その弁解をしたもの(よめる歌多くきこえねは)もあるという。

実例を若干紹介しよう。

⑦ 「世中にある人ことわざしげものなれば心に思ふことを見る物きく物につけていひ出せる也とは。真名序に人之在世不能無為思慮易遷楽相変と誓るを。後人こゝに混し来れる語にして首章の注意也貫之の文にあらず。此彼の雅なると俗なる且意の重疊せるを見てわかつへし」(市大本)

① 「此哥あめつちのひらけはじまりける時より出来にけりといへること。これ首章に人のこゝろをたねとある文にそむきたるが貫之にあらざる證なりされは秘伝の説と皆無益のこと也。五句が中にあめつちといふことの三たび重疊したるは諸説を拾ひたる物にして一人の意より出さる證也。」(同)

② 色ごのみなる歌はまめなる所に出しがたしとならば此集恋部の中には、復覧にははかるべき歌も多からぬかは。且好色を禁んとならば恋の歌のみ他の部に超て五巻にとるべきかは。(同)

真名序も、次にしるすように、後のものであるとするのであるが、かなの序の後人の筆の部分には、真名序によるものも多いことを言っている。

こうした本文批評は、おそらく真淵の古今集会読などで、真淵から聞いたところを、さらに拡大したものであろう。

真名序偽作説

真名序とかなの序との成立については、諸説があるが、影面は、かなの序は貫之、真名序は、当初なく、天暦よりも後の世に偽作されたものと考えた。その証として、次の4点をあげている。

① 「天曆の御時今の本の如く古今集に序二つあらばかの栄花物語（注、月宴）の文に。古今には貫之がいみしき仮名序をかけるが上に真名序さへあるを。後撰に序を一つだに誓人のなきをなげかせ給ふと抑揚していふべきを。その名聞えざるは村上天皇の御世にはいまた真名序なきことをするべきより処の一つ也」。

（市大本）

② 「乞食之客以此為活計之謀と書しはいつれの御世をさせるにや延喜の御時いまだかくの如きことはあらず。」（同）

③ 大友黒主之歌古猿丸大夫之姿也とあるが、「猿丸大夫といふことの自余の物に見えたるは歌仙家集のみ。……其猿丸家集の偽書なることは古今に出たる歌に校合してしるべし。いかで黒主のかれが歌に似たることあらんや。」（同）

④ 「枕詞とは序のこと」、源氏物語の「枕ごと」もそれである。紫式部は百余年後の人だがまちがえていない。真名序に「臣等詞」とその意を得ずに書いたのは、古今時代より後の人である。——これは「まくらことは」の解釈を影面流にしてはじめて成立つものである。影面は、「まくらことばは……」の意味を、序文が義理なく花やかならぬことの長長しいのを聞く人の思うところおそろしく、よい歌に対しても似つかわしくないことをはじめるの意にとっている。（真淵は「まろら」の誤写とした）。

注

注は、従来の注書にあるのと同じことは略したとことわっている。本文としたものについては、文意・語意・修辞・事実などを説明し、時々助辞についてもふれている。削除文については、貫之作でないことを弁ずるだけである。

注に見られるかれの古今集構成論を紹介しておこう。

古今集構成論 対という見方で構成を説明している。

○第三の章は首章に対し、第四章は第二章に対する。（序文）

○部立でも次のようになっている。

四 季	賀	離別羈旅	物 名
恋	哀 傷	雑歌上下	雑 体

真淵説との関係

真淵その他近世の人の名は出ていないが、契沖説や真淵説をうけていることはたしかである。ところで、真淵説を批判しているところがある。

① ある人わが国の歌をこゝにありてみづから和歌と称し、吾国の語を和語といひ、吾国の文辞を学ぶを和学といふは非也と弁せり。されど応神天皇の御世より此かた西土より文物を伝へてこゝに通ぜざること少なし。……さきだつは制しおくるゝは制せらるゝも亦義也何ぞかの弁の意必固我（吉野云、国家か）のわづらひあるに似たるや。

② 或説に序歌といふ物をついで歌といひ一句の枕詞をかふりこと葉と和語にいへど出所なきこと也。（これは「冠辞」を言ったものであろう）

6 百人一首歌のこゝろ

この書については、（上）を草した当時はその所在を知らなかった。その後出た岩波の「国書総目録」に、別名「百人一首略抄」で、写本2部（国会図書館本・東大本）を記載している。同書に「百人一首歌の意」（岡山大学池田文庫）とあるのもそれである。（原稿提出後見ることを得たので、p18に付記する。以下の記述には池田本のことを加えたところがある）

国会図書館本（191, 596。以下略して「国会本」という）は、表紙・扉・内題とも「百人一首歌のこゝろ」である。序の上に「飯川氏」の蔵書印を有し、扉に「藤塚塩亭謄写」、末尾に「塩亭翁謄写

乗廓(?)居士識」(あとに「飯川氏」の印)とある。いつの書写かはわからない。明治34年帝国図書館購求である。扉1丁、序2丁、本文96丁、1面9行、注は1行20~25字。

東大本(E31, 1012)は、表紙は「百人一首 村上注 全」、内題は「百人一首歌のこゝろ」で、扉はない。序のはじめのところに、「不忍文庫」「阿波国文庫」と判読困難な印とを有し、本文の末尾のあとに

安永八己亥年二月十四日写畢

とあって、そのすぐあとに「阿波国文庫」の印がある。序1丁、本文63丁、1面12行、注は1行26字前後。

両本とも「百人一首略抄」の名は見えない。「国書総目録」にその名を出した理由は知らない。

両本とも誤写が相当ある。東大本には書写者が文句を節約したかと思われるところもある。しかし、誤写とは思われない、ある程度長い相違が時にあるので、別系統の本である。相違の内容からみて、東大本は修正本の系統と思われる。

序

序には、百人一首の出典が九代集にわたることを述べて、

此百首は古今より新勅撰に至るまで九よろひのふみにかよひ 後鳥羽院順徳院の御製をかけてぬき出られしかは。まことに広沢の池の心ひろく。鏡のやまの影明らけくなんある。かのきみのむねとおもほしけん歌のすかた見つへく。心のよるかたつよきふみも亦しりぬへし。

と、定家の歌の理想もわかるし、景仰する歌集もわかるであろうと言っている。古今集から24首採り、後拾遺・千載・新古今から各14首とってあると述べているから、定家が古今集をもっとも景仰したことがわかるということを行ったものと思われる。これは影面の古今集景仰によりどこかを与える意味があらうと思われる。次に、

今かたみにふみにあそふ人のうつくしうするわらはの為に。おもふ心をかいつけてよといへれば。これをとかんとするに。秋の田の御歌は後撰に春過ての御歌田児之浦の歌は。新古今に載られたれとも。それよりさきいとふりもて来たることにしあれば。伝へまとひしこともあるにや。たとひときゝぬの解さり解来りはとりのをさをさをさもとの心をうることありとも。身におはぬつみさりとこらなければ。此三首の歌のこゝろはおそれと かさるになん。宝曆十年五月もちの 日源かけともしらす(東大本による。国会本・池田本ほぼ同じ)

とある。これによって、源影面の著であり、児童の為にするものであることがわかる。なお、国会本には、本文の最後に「正二位藤原宗家卿門人 源影面著」とあるが、東大本にはない。「秋の田」「春過ぎて」「田子の浦に」の3首の歌意を解かぬのは、万葉集の歌と著しくちがっている(「伝へまとひしこともあるにや」)ので、その難を言わなければならなくなるためであろうか。注を見るに、この3首の「歌の意」はないが、語句の注はある。

成立の時期と他書との関係

この序によって、本書の成立は宝暦10年5月ということになる。

ところで、本書の中には、「委くは□□□に出しぬ」「□□□に委くしぬ」のような形で影面の著書が出ている。数字は歌の番号である。

古今集もとのこゝろ	2・5・7
助辞分類	1
枕詞分類	2・33
類聚積	2・17・30・45・59
山のしづく(万葉集の注釈)	3

これを見ると、これらはすでにできていたことになる。「古今集もとのこゝろ」には「宝暦十一年五月」とあるが、その草稿の少なくとも一部分は宝暦10年以前にできていたと言えよう。他の4つも草稿であろうし、中には著述中のものもあったかと思われる。上の5つのうち「枕詞分類」は(上)ペ10の著述目録には出ていない。「類聚釈」は、「光彩部」「容様部」「延言延語部」の割書きがついているのがあるから、およそ(少なくとも組織立ては)できていたのかもしれない。

注

注の形式は、まず歌をあげ、次に出典をしるし、語句に注し、「歌の意」を説明している。作者伝はない。これは他書にゆずる由ことわっている。地名は「駿河の勝地」程度で、くわしくない。歌の字句について伝写の誤を訂正することもある(例、55の「滝の音」が拾遺に「滝の糸」とあるは誤であろうなど)。語の清濁に注意し、助辞について説くところもとても多い。語は、漢字の字義によって釈し(例、いたづら「徒の字義」)、類語をもって説明し、約言説で解することが多い。歌は吟声の美しきに随うという考え方から、延約も、助辞の添加なども、句調のためとしている。歌意や歌の構成について類歌を引用することが多い。また、古事記・日本紀・万葉集・土佐日記・伊勢物語・源氏物語・うつほ物語などを引用することも多い。ことに万葉が多い。こうした証拠によって言おうとする態度は、真淵に学ぶところであろう。かれはよく「証」ということばを使うのである。次に、かれは「一首の眼」ということも言っている(22の「わびぬれば」35の「あまりて」)。

歌に対して評を下していることもある。(数字は歌の順)

7 万里の外なる客情。かもといふ助辞にこもれり。

48 おもはぬ人をおもふ心さまをよく描したる歌に侍り。

51 歌の意と縁語とたとへは。紫綵など見るやうにつゝけたるもの也

57 (めぐりあひて) 上句は年比経て邂逅に相見し友のことを表にて。月の風情其中にあり。下句は其夜の風景を表にて。友のいそぎにしことその中にあり。おもしろき歌の姿也……かなの助辞に。あかすをしめる嗟嘆の情を含めり

81 (ほととぎす) なかむれはと侍にて一声の後待ほと其曉の風情目の前にあるかこくおほゆる歌也

なお、仲麻呂の歌のことに關して、古今集の左注は後人のわざだと言っている。

「古今集もとのこゝろ」の歌注の伝わらない現在、影面の歌注の実際は、この書によって見られ、「もとのこゝろ」の注のさまも想像できるのである。ここには、そうした意味で、古今集からの歌の注と、それ以外の歌の注とを例とした。いずれも全文である。

○人はいざ人(心)もしらす故郷は花そむかしの香にほひける

古今集にはつせにまうつことにやとりける人の家に。久しくやどらて。ほど経て後に至りければかの家のあるし。かくさだかになんやとりはあるといひ出して侍りければ。そこにたてりける梅花を折てよめる貫之とあり○初瀬は大和の勝地。人のまうつことは。枕草子にも源氏にも〔何にも〕見えたり○いざとはそむきて答る詞。否の字義に同じ。伊勢物語に。梅つほより雨にぬれで。人のまかるを見て。鶯の花をぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさんと侍る答に。鶯の花をぬふてふ笠はいなおもひをつけよほしてかへさん。さの濁。なに通ふ類語多し。不知と誓たるはわかしらぬことを。人のしれりやといふ時の答に義を得てのこと也。聞さることを聞しやといふに答る時は不聞の義となれば。哥によりてわかつへし○哥の意は題にかくさだかにやとりはあると。久しきを恨て。よくそわすれ給はず(さりける)といふ意なれば。いざ人はむかしの心に違(たかへ)ることもあるにや。されとふるさとゝなりにし奈良の都にも色はかはらす花は咲けりとこそうけ給はれ。此花の香のむかしにかはらぬをしるへにてまかりわたれば門違ふへきにあらすとあるしの言葉に反(そむ)きて答し也○故郷とは奈良のみかとの御哥詞にしたかひて。つゝけたればなづむへからす○花をもてみつからに比したりといふ説は。作者の意に違ふへし(東大本による。()内は国会本。[]内は国会本にあって東大本にないもの)

この注は、おそらく、「古今集もとのこゝろ」のこの歌の注と大同小異であったであろう。この

歌について「助辞分類」にも、奈良の帝の「色はかはらず花はさきけり」の「歌の意をあるじの心にそむきて、傍に照したり」と説いている。貫之には本歌取的な歌もあるから、この影面の説も参考になるであろう。

○瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはんとそおもふ

詞花集に題しらす新院御製とあり○瀬をはやみは瀬のはやくてといふ義。瀧川のは瀧川なす(傍注「如」)といふ義。風をいたみ岩うつ波のと既侍しに同じ〔てらしてしるへし〕○上句は序にて喩をかねさせ給へり。なかれの中に岩ありて水を障^{カッ}れは。暫二瀬にわかれてゆけとも。又末には一瀬にあふ風情に。たとへさせ給ふとする時は。御哥の意。今さはりありて別るゝとも。此程過て末にもあはんとおほすと也。類歌は。万葉に一瀬には千たひさはらひ(傍注「障ノ延語」)行水の後にも逢ん今ならずとも。又岩にせかるゝ急流のわかれを。われてといふ語にのみ須させ給ふ喩とする時は。御哥の意。今はみそかなる御中なれば。疎遠なるに似たれと。末には親切にもあはんとおほすとも承はられ侍る。われてといふ語の。切にといふ義なる證は。伊勢物語に。二日といふ夜男われてあはんとといふ。又金葉に。蔵人に侍ける時。内を出て女のもとにまかりて三か月のおほろけならぬ恋しさにわれてそいつる雲の上より是のみならず多かれと。皆切にといふ義にて。わかるゝといふことを。われてと略語せし物をいまた見侍らねは敬慮のもしかくやおはしましけん疑はれ奉る(同上)

なお、「わかいほほみやこのたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」の歌について、

此歌の右に。我庵は三輪の山もと恋しくはとふらひませ杉たてる門。といふ哥を相対して載て。かの歌の意はわか世はなれて住所にたに。人のためこかしと下侍風情侍るにむかひて。喜撰の歌の意はいな既世中を捨たる物そとして人の間は来らしと其同僚か傍にてことほりたるか如くに。意の相背きたるをとりたるもの也。又同集春の部にも。梅か香を袖にうつしてとゝめては春は過ともかたみならまし。といふ読人不知の歌に対して。ちると見てあるへきものを梅花うたて匂ひの袖にとまれる。といふ素性法師の歌を載て。一首は香の袖にとゝまるをよろこび。一首は香の袖にとまれるをくるしといへるをとれり。古今にはかく部類したるも少からず(東大本。国会本・池田本は異文)

と言っている。これは「余材抄」に、梅の歌について「右の歌に贈答せるやうにつらねたり」とあるなどにヒントを得たものであろうか。

7 古今和歌助辞分類

岩波「国書総目録」には、写本1部、刊本9部が登録されている。わたくしの一見したのは、そのうち刊本4部である。その本文は同一の板木を用いたものと思われるけれども、刊記などはみながっている。

① 刈谷市立図書館本(2643) 上下を1冊に合綴。本文下55丁の次の丁に「右雪齋蔵版(「雪齋」「影面之印」の印を押す)明和六己丑初冬 東都書林 植村藤三郎 西村源六 近江屋伝右衛門(住所略)」とあって、本稿(上)ペ10に引用したように雪齋の著述目録が裏までつづいている。その次に検丁(目次)がある。「明和六己丑初冬」の文字は他とは別に押したもののようである。

② 書陵部本(鷹 295) 上下を1冊に合綴。本文のあとに検丁、その裏に「京師書林 林宗兵衛」とあるが、この書林名は印刷した本に押したようである。*日付けはない。

③ 神宮文庫本(三4475) 上下を1冊に合綴。もと御巫氏の蔵書である。終りに検丁があり、それが見返しを兼ねており、裏には文字はないように見える。

④ 無窮会本 上下2冊。上巻の見返しに「雪齋大人著 古今和歌助辞分類 京師書屋 斯文堂」とあり、初めに検丁がある。上巻の終りの見返しに「明和六丑年 寛政十二申年校正 江戸書林 植村藤三郎 京都書林 吉田四郎右衛門 林宗兵衛」とある。下巻の終りの見返しには、日付けはなくて、「皇都書林 菱屋孫兵衛」の発行書目がある。

本書の序文には「明和六年に日下部背面序せり」とある。それと、刈谷本の刊記とを見ると、本書は明和6年10月初版ということになるようである。「明和七庚寅年輯」とあり、明和九庚寅

(正しくは壬辰) 年季冬の刊記を有する京都武村新兵衛刊行の書籍目録(註3)にも「古今和歌集助字分類 村上織部」として登載せられているから、おそくとも明和7年までにこの書が刊行されていたことは確認できるのである。

寛政校正版がどれだけ手を加えたものかはまだ調べていないが、部分的な誤刻などの訂正だけではあるまいか。以下は手許に写真のある無窮会本によって述べることにする。

書名 本書の書名は、題箋や扉には「古今和歌助辞分類」とあるが、内題は「古今集和歌助辞分類」であるから、「集」の字のあるのが正式であろう。

本の体裁 寛政校正本では、上巻のはじめに検丁1ページがあるが、もとの版では検丁は本文のあとにあったようである。上巻は、序1丁、凡例1丁、本文58丁で、下巻は本文55丁である。1面10行、1行は約30字。だいたいB6型の小本である。

著述・出版の由来

本書の序に次のようにある。

日本言の葉の員。すめる音四そち余り七つ。濁れる音はたち也。書は言を尽さず。言は意をつくさすといへども。よろこひにもかなしみにも。ことの葉に余れる情を踐て。人の魂を動かしむるものは助辞也。てにをはを得たるは。比興律を成して固しからず。五言七言句をなしてしらべ静かに。長きにも短かきにも章をなして言葉多からず。これに疎きは意とほりがてにして言葉さわがし。然れば歌にとめりし人の多かる御世に。文にさかしきがよく見て。よしと撰ひおかれしあとのまにまに。学ふにはしかざらんといひて。源影面師。古今和歌集もとのこゝろを著はしけるに。かの集に出たるてにをはの分類。上下二まきを為せりける。其旧情より先にと。これをおもふどちの為に。おのれ請て梓になん鏤めける。……明和六年に日下部背面序せり。

影面が、歌学びの模範を古今集に求め、「古今集もとのこゝろ」を著したついでに、この「助辞分類」を著したのを、願うてまずこれから上梓したというのである。したがって、成立は以前であり、刊行が明和6年だということになる。刊記にある初冬、すなわち10月は、賀茂真淵がなくなった月である。あるいは、真淵の怒にふれた影面が真淵の没するのを待って出版したのかもしれない。刈谷本の刊記は、板木はすでにできていたので、年月だけ別に押したと解釈できないであろうか(註4)。

「古今集もとのこゝろ」は、前述のように宝暦11年5月とあるが、宝暦10年5月の序のある「百人一首歌のこゝろ」に「委くは助辞分類に出しぬ」「古今集もとのこゝろに……注しぬ」とあるから、両者の草稿ないしは計画は宝暦10年にはできていたことになる。「助辞分類」が宝暦10年5月以前にできていたとすると、宝暦10年3月の序のある「氏还乎波義慣抄」と前後して成立したことになる。これはなかなか興味のあることである。

この序は、影面の門人日下部背面(そとも)の名でしるされているが、影面が門人の名をもって書いたのかもしれない。

助辞分類の名義

凡例に、

一助辞とは。天尔遠波といふことの借字也。てにをはとは。唯此四つの義にはあらず。語の意を成しむること葉の。千種万種を総て。称せし名目也。且こゝには助辞のみにあらず。発語の辞及び約言延語の。助辞に疑はしきも略出せり

一分類とは。五音の第一韻より同韻を次第にわかつてるがいひ也

一第一韻とは。安加左多奈波万也良和の並ひ也。第二韻とは。伊幾志知尔比美伊利井。第三韻とは。宇久須都奴不无由留宇。第四韻とは。氣世天祢返免惠礼衣。第五韻とは。遠古曾登乃保毛よ呂於也。同音によら

ずして。同韻にとれるは助辞に韻の因みあれば也
とあり、助辞は「てにをは」を言ったものであるが、助辞以外の助辞にまぎらわしいものも入れたのである。「分類」というと、意味とか職能とかによる分類を予想するのであるが、これは、音による「分類」であって、いわば、検索の便をはかった、音別配列の助辞辞典というべきものである。その音配列は五十音図を横に読む順によっている。

内 容

上巻は第一韻 安1, 加18, 我7, 左10, 邪1, 多4, 太1, 奈15, 波1, 万8, 也4, 良4を収め、下巻は、第二韻 伊11, 幾1, 志2, 自1, 知1, 尔4, 美1, 第三韻 宇1, 須1, 受1, 都4, 豆1, 奴2, 不1, 夫1, 无1, 由3, 第四韻 気6, 解1, 勢2, 天4, 泥1, 祢1, 返3, 倍2, 免3, 礼1, 第五韻 袁2, 己4, 呉2, 曾1, 叙2, 登2, 杼1, 乃2, 毛4, 余3を収めている。書中の数を合計すれば約160の助辞および助辞的のものをあげているわけである。たとえば、加部には、

か かな かも かに から かは かく かの かつ かき かたき かね かねて かける かる から・かり・かる

毛部には

も/ぞも・はも・かも・しも/にも・をも/とも

をあげて4条としている。この場合は、「同韻にとれるは助辞に韻の因みあれば也」である。こうしたのもあるが、大部分は、助辞の頭音の部に属させている。

解説の形は次のようである。

○加といへる語末の助辞。三種あり。

其一にはことの情を商量する辞の裏に。歎する意の具はれるあり。歎は歎の辞也と注せし。漢字の義に似たり。又それか中に。

森上 浅みとり糸よりかけて白露を。玉にもぬける春の柳か。 僧正遍昭

秋上 河風のすゝしくも有か。うちよする浪と共にや秋は立らん 紀貫之

同 いとはやも鳴ぬる雁か。白露の色とる木々も紅葉あへなくに 作者不知

如此他の事情を歎美せる辞と。一首の語意より聞ゆるあり。おのつから涼しくも有か夏衣。日もゆふくれの雨のなこりになど。新古今にも見えたり。

森上 折とらは惜けにもあるか桜花いさやとかりて散まはみん 作者不知

同下 とゝむへきものはなしにはかなくも。散花ことにたくふこゝろか 凡河内躬恒

……………

かくわかうへを嗟嘆せる辞と。一首の語意より聞ゆる類ひ多し。(中略)

其二には事情を商量せる辞のみなるあり。歎は疑ふ辞也と注せし漢字の義に似たり。又それか中に。

森上 みよしの山へにさける桜花。雪かとのみそあやまたれける 紀友則(5首省略)

かく疑ひを相響く助辞なくて。疑ふ辞におのつから聞ゆる類ひ少なからず。(中略)

其三には歌の辞にもあらず。たゞ延語約言の辞あり。

森二 ねになきてひちにしかとも。春雨にぬれにし袖とははこたへん 大江千里

あれはなきてぬれしなれともといふことを約めたる辞也(後略。其三は、今日キの活用形としているシカ、マンシの活用形としているマンシカである)

ところで、各助辞については、たいいてい、助語の辞・語末の助辞(辞)・容様の辞・発語の辞(ことば)という説明を施し、語末の約言の辞(タル・ザラ)・句調の延語の助辞(ラク)のような説明も多少見える。これは、助辞をおよそ4種に分けていることになる。これこそ「分類」ではないかと思われるが、影面はそうは言っていないのである。また、発語の辞は助辞ではないと言っている(凡例)。しかし、この「分類のようなもの」を見ると、

容様の辞は、容様をあらわす接尾辞（げ・さ・さま・さび）で、
発語の辞は、語の上にくるもので、感動詞（あな・いざ・いで・いな）副詞（なかなか・かく）
接頭辞（うち・かき・ふり・さ）などである。

助語の辞は、はなはだ多く、副詞・数詞・代名詞・形式名詞（ゆゑ）・活用語尾・接尾辞（がて
ら・づから）形容詞（かたき・なし）・動詞（かね）・助動詞（ごとく・べし・ず・ぬ・ね・
し）助詞（格助詞・副助詞・係助詞・接続助詞の類）など、だいたい文の中にあるもの

語末の助辞は、主として、助動詞・助詞（主に終助詞）であって、語・文のおわりにあるもので
あって、

容様の辞のほかの3種は位置性によるもののようである。

助辞という名称について

「助辞」という名称が国語学で用いられたのは、影面のこの書が初めてであるといわれている。
それは、福井久蔵「日本文法史」（明治40）の「術語字引」（『増訂日本文法史』にも収録）が初見かと思
う。その後、伊藤慎吾「近世国語学史」福井久蔵「国語学史」東条操「新修国語学史」山田孝雄
「国語学史」などにも見える。これが書名として用いられたのは、本書が最初かもしれないが、
「助辞」の名称を用いることは賀茂真淵にすでに見られる。

宝暦以前の真淵の著書についてみるに、延享3年の「祝詞解」に「助語辞」「助辞」（たとえば
「大袂」に）とあり、寛延の「万葉解」にも「毛与は助辞のみ」など言い、「冠辞考」（宝暦7年橋
枝直跋、刊本）にも用い（例、あをによし、あらかねの）、^{テニヲハ}「冠辞考序」の頭注には、

上に有をことおこすことばといひて、字は発語とかく。下に添をたすけことはといひて、字は助辞と書
り。（アンダライン筆者）

また、「源氏物語新釈例」（宝暦9年以前）にも、

語の上に有て心なき語を發語といふ。……又中下にあるを助辞といふ。吾しかよは、ぬれてをゆかん此しと
をとの如し。

と言っているし、「冠辞考」「あきやまの」の解説の中に、

皇朝のむかしの語は、必助辞をもてこそ事を分ちたれ

と言っている。ただ、真淵は「下に添」を言っているから、従来の「てにをは」をひっくり返して
「助辞」と言ったのではないようである。

真淵没後の明和8年3月、黒生・魚彦・春海が作った「泉居蔵書目録」の中に、「万葉語類」
「日本紀語類」と並んで「古今集助辞」1巻がある。同書の「泉主著述目」には見えないものであ
るが、この3部とも、あるいは真淵の資料ノートであったかもしれない。影面の「古今集和歌助辞
分類」が真淵に贈られたのではなからうと思われるが、どうであろう（(上) べ6参照）。もし、真淵
のノートでもなく、影面の書でもないとするれば、真淵のなくなった明和6年より前に「古今集助
辞」と題する書を作った人があったことになる。^(補註1)

そもそも、助辞という語は漢文法の用語であって、伊藤東涯にも「助辞考」（一名「助字考」、元祿
6年序、享保元・寛延4年の版がある由）の著がある。それに「賓主ノ際ヲ道ヒ、虚実ノ用ヲ通ズル所
以ノ者ハ其レ助辞カ」（原漢文）とある。

してみると、真淵は、漢文法の術語を国語の説明に用い^(註5)、その門人であった影面はそれに
ならって、広く「てにをは」にかえるに「助辞」の名をもってしたと解すべきであろうか。

影面は、その著に「助辞」の文字を用いており、「てにをは」とフリガナしていることもある。
「百人一首歌のこゝろ」（宝暦10）「古今集もとのこゝろ」（宝暦11）「采藻編後付」（宝暦11）「紫
語素注」のいずれにも出ている。

なお、国語学大系本「氏迹乎波義價抄」に1か所「助辞」が見えるが「助語」の誤りではないかと思う。

氏迹乎波義慣抄と助辞分類

この2書はほぼ同じころに成立したであろうと推定した。

義慣抄の著者雀部信頼は他に所見のない人であるが、契沖の書を引用している。雀部の氏は実在するのであるが、同時代の建部綾足の氏と類似しており、何か関係がありはしないかと思うけれども手がかりもない。2書の類似点から、雀部は影面の匿名ではないかとも考えてみたが、同一人とするには無理がある。信頼は古今集真名序からこの書名を採っているが、影面は真名序は貫之作ではなく、後人の作としている(宝暦11)ので、それから自己の書の名を採るとは考えられない。

今、この2書と比較してみたい。

1. 義慣抄は宝暦10年成るといい、写本で伝わっているが、神宮文庫本は明和5年11月の写しである。助辞分類は、宝暦10年ごろに成立したかと推定せられるが、出版せられたのは明和6年である。

2. 両書とも古今集のてにをはについて説明している。義慣抄の序には、①てにをはをわきまえるのは作歌のもとである。②古今集以後の歌では、てにをはは古今集を出ないし、古今集は聖代にすぐれた歌人の選んだものだから、古今集のてにをはにならうべきである。③古今集のてにをはを「おなしたぐひをひろひあつめ」「わかちとゝのへて」義慣抄を作った、としている。これらの点は、助辞分類も同様の趣旨である。そして、両者とも古今集の歌をたくさん例示している。「証」というのは、影面のよくいう語であるが、信頼も例を「証歌」と言っている。

3. 両書は、てにをはを音をもとに「分類」したが、その配列法は、五十音図の横に(アカサタナ……イキシチニ……)並べるのである^(註6)。ただし、義慣抄は清濁を1つとしたが、助辞分類は濁音は清音の次に部を立てた。

4. 義慣抄はてにをはの下の音で同類を並べたが、助辞分類は主として上の音で同類とする。たとえば、前者ではカハはハの部、ナガラはラの部であるが、後者ではカハはカの部、ナガラはナの部である。

5. 例示のし方は、義慣抄は部類(春上など)と作者を歌の上部に傍書するが、助辞分類は部類を歌の上に、作者を歌の下に書く。

6. 両者とも万葉をよく引き合いに出し、また、漢字の義に引きあてて説明している。しかし、義慣抄は従来のにをは研究の用語・説明法をつかっているが、助辞分類は新しい説明をしようと努めている。後者は、そのために、かえってくださしくもなっており、前者よりもすぐれているとはいえない。

ともかく、古今集という1歌集のてにをはについて、用例を集め、部類別をして、実証的に説明しようとしたことが、時を同じうして行なわれていることは、注目すべきことで、梅井道敏(『てにをは綱引綱』明和7刊)や富士谷成章(『挿頭抄』明和4序)の研究もついであらわれる時の流れの象徴とも言えよう。

付言する。てにをはを部類分けすることは、「管見手尔波部類」(5巻1冊、東大国語研究室蔵、藤原季綱自筆稿本)にも見られる。清水谷実業や風観齋長雅の説を引いているから、近世中ごろのものであろう。春樹頭秘抄などを参考にして、従来のにをは説を整理したものである。巻1. かな つゝ 巻2. らん や などとし、「らん留」「おさへつめてはぬへき」などと分類し、それぞれ作例をあげ、巻2からは出典・作者も付記している。年代はわからないが、義慣抄や助辞分類にやや先んずるものではあるまいか。てにをはを分類してこうとする傾向がみられるのである。

古今集和歌助辞分類をうけたもの

影面の「古今集和歌助辞分類」を参考にして作られたと思われるものに、「古今集天尔於波分

類」1冊(東大国語研究室蔵)がある。53丁で、奥に「寛政六年甲寅仲春書 林長枝」とある。長枝は諸鳥の子である。諸鳥は寛政6年6月19日に没したから、その4か月前に子長枝が写したことになる。表紙に後人が「林諸鳥自筆」と書いてあるが、これは誤解であろう。編者が諸鳥か長枝かわからない。分類はいろは別で、伊部 ろ部(語なし) 波部……となっているが、その各部に標出するてにはは、影面の「助辞分類」のその部に標出するものとほとんど全く同一であって、順が入りかわったところ、加除されたところがほんのわずかにあるに過ぎない。そして、「影面云」「影友説」「影云」「影」などと影面の説をしるすもの15に及ぶ。影面のほかに名をいうのは冬満(1つ)だけである。これらの影面説の半数については「可考」とある。影面の「助辞分類」をいろは別にして用例や説明を簡略化したものようである。なお、諸鳥の歌は采藻編に20首も出ている。影面の親しい友人と見られる。

○例「かは」 「荷葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく」など3首の「かは」は「如此者」の意と影面は言っているが、この書には「影面云此三者如此者之意ヲ以解 可考」とある。

8 紫 語 素 注

この書は「国書解題」に簡潔な解説がある。藤田徳太郎の「源氏物語研究書目要覧」にも出ている。「国書総目録」に載っているのは、国会図書館本だけである。国会図書館本(写本)は、終に「阿波国文庫」の印がある以外に由来を語るものはない。表紙に「紫語素註 全」とあり、本文の初めに

紫語素注 一

正二位藤原宗家卿門人

源 影 面 著

とある。「国書解題」には、著者を「村上織部」とし、「村上織部は、……影面と号す。故に本書には『源影面』と記名したるもあり。」とあるところを見ると、国会図書館本のほかに伝本があったようでもある。国会本も著者自筆本ではない。著者とは思われない誤字がある。

この書は、自序(1丁半) 源氏物語并作者之評・紫式部系図(4丁) 凡例(3丁) と桐壺の巻の初め約みすなわち「物の心しりたまふ人はかゝる人もいでおはするもの也けりとあさましまてめをおどろかし給ふ」(古典文学大系本p30) までの注(20丁) とから成る。注は本文よりおよそ2字下げ、1面10行、1行およそ23字である。

本文の初めには

桐壺一の一

とあるから、桐壺の注が何冊かになる予定だったことがわかるが、完成したのか、どれだけできたのか、不明である。「国書解題」にも「今見るところ桐壺の巻一卷のみなるは、業の中止したる者なるべし」とある。

自序は、紫式部が「たをやめの筆に道ある心をむねとかきつゞけんも。ますらをのむくつけくせんがうたてあれば。をとこをんなのなからひを此ふみのすがたにかりて」書いたもので、これを読む人は「おのづからよきにはうつろひ。あしきにはそむき。心ひろく。ことの葉うるはしく。すかたゆたかに。おこなひみやびやか」になると言い、「此書出来て今はた七もゝあまり五十とせならんとす。世とほしといへともむらさきのゆかりあることの葉によりて。もとのこゝろをわけつれば名づけてしごそちうといふ。」と結んでいる。すなわち、「紫語素注」は、「源氏物語もとのこゝろ」に相当する名である。「もとのこゝろ」は「作者の真意」で、影面の愛したことばのようである。

「源氏物語并作者之評」には、○源氏物語五十余帖というのは、五十七帖あったので、五十四帖

ではない○源氏物語は資治通鑑にならったという説があるが、通鑑は70年ばかりおくれている○源氏は為時の原作であると狭衣にあるが、証としがたい○紫式部日記によって、式部が源氏物語を書いたことも、才覚のほども、歌に秀でたこともわかる○紫の物語というと紫式部が物語という義である、などのことを書いている。

凡例には、古来の句読は半はまちがっている、今は句ごとに作者の意をもとめ、章ごとに調を尋ねて、一卷の中にも篇を分けた。／助辞の誤りがあるのは伝写の誤りであろう。／流布の本のかなづかいは後世行阿仮字文字遣にならって書き改めたものであろう；今ここに出す本文および注語は、「いにしへのさだまれる仮字」を守って書いた。／源氏三箇の秘事 というのはつまらぬことで、すべて「そのふみの一語になづみて心一つに思ひをこれる家の説といふ物は証しがたき」ことが多い。／この物語の中にまことにしりがたいのは字音で書いた所である。／注釈は、在来の注でその意がたがわないのはここに略し、奥あるものは称し、誤っているものは論したり斥したりもした、また、意味のいろいろあるのはその大体をといて、あとは「類聚釈」にゆずった。／などのことを書いている。

桐壺の注のはじめに、

此巻の末に。かゝる所に思ふやうならん人をすゑてすませばやとのみ。なけかしうおほしわたると。源氏の君のすき給ふ心を書たるにて。十四五歳のほど其中にあることをしるへし。おとなになり給ひてといふことは。十二歳に其元服し給ふより末をかけたる文なれば。十四五歳の証にはいかゝ侍らん

とあるのは、湖月抄に、

此巻の末の詞におとなになり給ひてのちとあり其詞に十三四五歳の事こもりて

とあるのに対する批判であろう。

このように、本書は湖月抄をもとにして、句読を正し、章を分かち、文法を論じ、湖月抄の注でそのまま問題のないのはあえて注を加えず、湖月抄の注のいかがと思われる点を正し、注の足りないのを加えた。しかし、その改注はかならずしも適当でなく、むしろ湖月抄の注が適当であると思われるものもある。

さて、本文の前記の部分を11章に分けて、各章ごとに本文を出し、「以上二句一章」のようにして、「此章は……」と説明し、あとに語釈などがある。次に、各章の意味の説明を抄出する。「2句」などは本書の数字である。

① 2句（1センテンス）（……時めき給ふありけり）

此章は桐つほの更衣のことをかゝんとする序也。

② 2句（2センテンス）（……やすからず）

此章は前の章の意をうけて御かたかたのうらみの甚しきことを言外に極めたる文也。

③ 4句（1センテンス）（……おほんもてなしなり）

此章は前の章にいはゆる。あまたのうらみをおひて隙なくわづらふことをいひ。わづらふにつけて。ますますみかどのおもほしみだれ給ふことをつゞけて。次の章に玄宗皇帝楊貴妃に比せんの心を含たる文也。

④ 4句（2センテンス）（……まじらひたまふ）

此章は桐つほのみかどのもとよりの歡慮には明主賢后のおほんこゝろざしもおほしましけるを。好色につりの給ふこと玄宗の楊貴妃にみたれられしさま也とて。更衣のみやづかへをおしきことに。上達部以下天が下の人のいへば。此更衣の難儀至極也と書たり。

⑤ 3句（1センテンス）（……心ほそげ也）

此章は桐つほの更衣のうしろみなきことを。あはれむべく書なしたる文也。

⑥ 5句（3センテンス）（……かきりなし）

此章には世にたぐひなきみこをうみ奉られしは。此世の御ちぎりのみならず。前世の宿縁いかにあさからぬ御ことにやと尋ねもとづけて。前の章に及びなくいひおとせしをうちかへして。此更衣の幸は甚しく御かたかたにまさられたりと云たる也。

⑦ 7句(3センテンス)(……おぼしうたがへり)

此章には前の章の意をつのりて。右大臣の女御のやん^(マア)なきも。此更衣にはおされ給はんとする風情に書たり。○第一の句は文章の綱也。第二の句以下は其目也。

⑧ 2句(1センテンス)(……おもひ聞えさせたまふける)

前の章のはての二句には。一のみこの女御の御物おもひそはせ給ふ心を書。此章二句には。一のみこの女御の御制止もだされがたくみかどのおほん物おほすさまを書。次の章二句には。みかどの寵し給ふ故更衣のくろしきそひゆく風情を書。三所輪回して相襲勢をうつせる文章也。尤上手のわざなれば。いはゆるよくよまびははらにあちはひ出来がたくなん。

⑨ 2句(1センテンス)(……物おもひをそし給ふ)

此章になかなか物おもひをそしたまふといへる詞。又次一章の綱也。

⑩ 8句(6センテンス)(……やらんかたなし)

此章には御かたがたのうらみ給ふわざをつくして書。且はその恨み給ふが中に。更衣の身におはずはあるへからぬことを。はての一句に。極たる文也。

⑪ 3句(3センテンス)(……めをおどろかし給ふ)

此章は源氏君の容儀美麗。心情仁愛おはしませは。おにかみもえあらだつまじき一世のこの事の序也。

語釈の例を若干引用しよう。

○時めくとは。盛りなるありさまをいふ。榮の字の義の如し。

○人の心をうごかし——此更衣の時めき給ふ故にあまたの女御更衣。心うごきて嫉妬のわざあるをいへり。

(湖月抄——下臈の更衣嫉妬の心をうごかす也。玉小櫛——上臈下臈すべてにわたるべし)

○うらみをおふ〔湖月抄に引歌がある。名がないが和泉式部の歌である〕(同時代の歌を引くはずはないとして)伊勢物語に、人のゝるひごとはおふ物にやあらん。おはぬ物にやあらん今こそは見めと書し意をうつせし文也。

○おやうち具しといふ語より以下一句ととりたてゝといふより以下一句は。文を対ふ勢を相あらそふやうに書て。つひに更衣のかたを及はぬことに一句の末は餘せり尤巧也といふべし。

○玉のをのこみこ——玉の緒をのこといひかけ。ひかるみこ。光源氏と申すべき縁を此語に巧めり。玉の緒を命のことにいふ語は。こゝには大きに相違のこと也。(湖月抄所引花鳥「且又詞のつゝき玉のおと命の方へ取成侍也」)

○人〔よりさきに〕——桐つほの更衣若宮の御母をさしていへる詞也。(湖月抄「余の女御更衣よりさきに」)

○いさめとは制しとむむる義也。禁の字を万葉などに用ゐたるにてしるべし(湖月抄「嫉妬いさむる也」)

○みつほねは桐つほなり——此つほねは清涼殿よりはかればほど遠く。御かたかたのみつほねの末にあたれるを以て一章の文段を發せる物也。其文例既も出たり。猶以下にも多し。

○みかたち心ばへ——(伊勢物語を引用)「かたちよりは心なんまされりける」をうつしたるに似たり。

○かゝる人も世に出おはする物なりけりとはかくの如き人の世にいでたまふべくやおほえし。出来給ふ時は出来給ふ物也と警詞也。(若紫・桐壺の文を引いて)相てらして其文章の巧なることをしるへし。

真淵説の影響 この書の序・評・凡例・注それぞれに、安藤為章の「紫家七論」や賀茂真淵の説の影響があるように思われる。真淵の「源氏物語新釈」は宝暦初年に着手し、9年か8年かに完成し、田安家に差し出したようであるから、影面は見せてもらっていないと思う。しかし、真淵の門に出入していた間に真淵から得たものがここに出ていると思う。ことに注目すべきは、文章研究である。これは、本稿に1章を設けて、古今集序についての研究とともに、考えてみたいと思っていたが、都合で省略するので、ここにごく簡単にしておく。

漢文の文法(文章法)をもって、国文を考察したのには、早く加藤盤斎の徒然草抄があった(田辺爵「徒然草諸注集成」)。源氏物語の文章の検討は、安藤為章が手をつけ(「紫家七論」)、賀茂真淵がそれにならい(「源氏物語新釈」)萩原広道がそれをおしすすめた(「源氏物語評釈総論」)にそのよじをいう。影面が源氏物語や古今集序を漢文の文法から説いたのには、やはり真淵の影響があったであ

ろうと思われる。

9 歌 と 歌 論

歌 影面の歌で、その編集した「采藻編」初篇・続篇に載せたものは94首である。そのほかに、真淵門にあったころの歌が真淵周辺に多少しるしとどめられており((上)生涯)、また、故郷土佐に伝えられたものも母の七十賀の歌や「敏屋雑記」その他に載せられたのがある。それらを見ると、長歌・旋頭歌も詠んでいる。長歌の歌調は五七調である。ここには、短歌若干と旋頭歌1首を掲げることにする。長歌の一節は「生涯」p5に出した。また、影面の歌としてもっとも有名な「加茂川のこよひの月」も「生涯」に出しておいたが、あの歌は影面の歌風の代表と言ってよいかと思われる。以下の歌はすべて「采藻編」によるもので、「初」「続」を付記した。

今日不知誰計会春風春水一時来といふことろをよみ侍る

花鳥の色音と共に久かたのひかりのとけき春はきにけり(初)

〔「采藻編」巻頭の歌で、かれの自信の作であろう。「真淵歌集」・「うけらが花」にも「春風春水一時来」をよんだ歌がある。真淵のは延享2年正月のである。〕

とさの國のむろつに船はてうつきのついたちの日また夜をこめてこき出て来るに來しかたの空に時鳥の鳴を聞て

わたの原榜出て行舟をかもとふはいつこの山ほとゝきす(初)

夏の初のうたとてよみ侍

春はしも花のすさみにいとはれし風の恋しき夏はきにけり(初)

寄花恋といふことを人々と共によみ侍る

山高み風のまにまに散花の空になり行恋もするかな(初)

春はかりとさの國なる母の七十賀し侍りけるにかしこの地の名によせて歌よみて賜りけるついでによみ侍ける

たらちねをかけてそ賀ふおほさとのち世の小松の神のまにまに(続)

しはすばかりに京師より東都にかへり来るにふしのすそのにて大神香苗かかしてに行にまかりあひて相別れんとするほとによみける

かへり見よふしの高ねをめにかけて子をあふくらん父母の為

ゆきゆきて都の春に逢ん日もあつまの花はよそにたとへ(続)

物名 かにさくら

君こそはわれを中にはさくらめとたれにおられん恋もせなくに(続)

立夏のおそかりける年の卯月の始めによみける(旋頭歌)

月よめは夏なりなから猶残る春うへしこそ山郭公來なかさりけん

かれは古今集を理想とするのであるが、第1・2に見られるように力強い歌も作っている。

宝暦6年県居の歌合によんだ「わが中は」の歌が、「しらべいやしげなり」と真淵に評せられたことは、すでに「生涯」p5に述べた。そういえば、

身のほとにしつめる野への狭ければつめとわかかなの袖にすくなき(続)

は「若菜といふことを」豊後岡侯の命でよんだ歌であるが、「すがたいやしげなり」という感がする。

歌論 影面の歌に関する論は「采藻編後附」にも見られる((上)p12)が、ここには、古今集論と土佐日記歌論説とを述べることにする。

「采藻編」初篇の序に古今集をたたえたことはすでに述べた。「古今和歌集もとのことろ」にも次のように言っている。

古今集の歌は弘仁より延喜に至る風体にして和歌有て已來いまだかくの如くすがた美はしきはなし。(狩野本なし)

また、「古今集和歌助辞分類」の目下背面の序にも(影面の意見とみてよい)

万葉集よりかみつかたの歌は古詩の如く。後拾遺集このかたの歌は。明已來の詩の如し。それが中にありて。古今集の歌は。成唐の詩の如きか。

というのである。

「続采藻編」の編成が古今集をまねていることはすでに述べた。

影面の古今集尊重は、真淵に入門した当時、真淵が古今集を重んじていたことにも重要な原因があらうと思う(延享4年、真淵は谷真潮の歌を「古今万葉の間」をよんでいると激賞している)。(補注²)

土佐日記歌論説 影面は、藩への上書の中に、

和歌和文は貫之の旨を開き、古今集は貫之の本意にかへり、((上)ペ7引用)

と言っているが、「古今集もとのこゝろ」は「貫之の本意にかへ」った解釈をしたの意であらう。

さらに、かれは、

詠歌の道は貫之伝を土佐日記の中にて自得仕候。(同上)

と言っている。これによると、かれは土佐日記を歌論書、ないし和歌の教科書と見ているようである。その詳細はわからないが、近ごろ萩谷朴によって提出された、土佐日記は歌論書、和歌入門の教科書と見る説(註⁷)と似た点があり、注目すべきことではないかと思われるのである。

10 言語研究

上にとりあげた諸書には、常にことばを問題にしていることは当然であるが、中にも助辞について説明することが多い。

ぞの助辞は。ことを極めんとする語なるか故に。其終。き。し。く。ぬ。ぶ。む。ゆ。る。とゆく也。さらぬもあるやうなれど。或句調によりて二三語をそへ。又は語を略し。意を言外におくことありて。皆此八言に帰せり(「百人一首歌のこゝろ」5の歌。池田本。東大本・国会本ほとんど同じ)(係結のこと)

通常はこれほど長い説明ではなく「なの助辞は自得の詞」程度のことが多い。影面の諸書を通覧すると、助辞学者という感じもするのである。「采藻編後附」に、

こゝにもてにをは伝を天正の世よりうけつき来れるか侍るを。(吉野云、姉小路式のことか)日本紀古事記の歌より万葉及び世々の集伊勢うつは源氏栄花等の物語にさへわたりてこれをたゞし。やまと詞のこゝろてにをはの味ひ本末相通して其家にもまうしつれば。或人の独一家のをしへをのみ守れる見識の如くならず。此編にとれる歌のてにをは皆古歌を師とせり。和歌に師匠なし。旧歌をもて師とすとは定家卿もの給はずや。

とあって、姉小路式を中心とするてにをは書に、古典の例を照合して正したという。上にいう「天正より」伝わった書かどうかはわからないが、国会図書館亀田文庫に、影面の写した(転写かもしれぬ)「天仁葉の大事」(姉小路式的一本)がある(815.7 Te 1463)。

「後附」に言っているように、かれは古典の用例を集めて検討したであらう。その書にはよく類例を多く引用するのである。「古今集和歌助辞分類」はそうした研究の1つのまとまったものであると見られる。

ところで、ここに1つ注意すべきことがある。それは、上の引用にもあるように、「句調によりて」ということである。「句調の為に」語(といっても主として助辞)を加え、また、約言延言するとも言っている。このことは、真淵が、「冠辞考」序に、七五言に少ないときに、上にも下にも言をそえて調べができると言っているのと似ている。

○みよしの「み」は「句調の為にそへたるのみ」

○待つとしのしは「句調の為の詞のみ」

○なくや霜夜のやは「意なき詞にて句調の為にそへたり」

○ちちについて「一言にては語の調はさるは今一言を副てちゞといふのみ」

○夏きにけらしは「夏のきてやあるらんといふことを句調のために約言せり」

(いずれも「百人一首歌のころ」)

さらに、影面は散文でも調を言っている(紫語素注)。

影面は、かなづかいについてもくりかえし言い、仮名文字遣の誤りを正し、古書のかなづかいによると述べている。ただ、多少の誤りはあるようである。(転写本の誤りは問題外)

- 注1 「伊勢物語古意」は、小山正氏(賀茂真淵伝)は宝暦2年12月の市左衛門あて書簡によって、それより少し後、宝暦3、4年ごろに成ると推定された。しかし、延享3、4年の谷垣守メモに「伊勢物語古説」の名が見える。
- 2 「住の江の松もあひおひのやうにおぼえ」市大本の注の摘出句には「相老」とあるから、市大本書写者の誤写である。「相老」は春満の創見であると真淵の続万葉論に見える。影面も「相生の義にはあらず」といっている。
- 3 「江戸時代書林出版書目録集成」所収。この本はおそらく明和7年に出版する予定で「明和七庚寅」と刻したのを事情があって9年になったので「七」だけを「九」と改めたものであろう。その本に載っているからには「助辞分類」はおそくとも明和7年には出版されている。
- 4 刈谷本の由来は知らないが、刈谷侯夫人およびその侍女たちは「采藻編」の作者であるから、影面が刈谷侯に進呈したか、侍女たちが購入した可能性もある。
- 5 あまり注意せられていないようであるが、「国学者伝記集成 続篇」高橋宗直の項によれば、真淵は宗直門人録に名をつらねている。おそらく有職を学んだのであろう。宗直は漢学を伊藤東涯に学んだ人であるから、堀川学派の学が真淵にも及んだということが言えるかもしれない。
- 6 谷真湖も、宝暦10年以後に、「万葉助語集」というノートを作っているが、その配列はヲコソトノモカサナハヤライキシニミリウクスツムユヘケテネヘメレサで、2音節以上のものは、適宜上下音のどちらかに入れている。当時こういう配列法が行なわれたのである。
- 7 萩谷朴氏「土佐日記は歌論書か」(國語と國文学23, 6) 同氏「土佐日記創作の功利的効用」(同38, 10) 同氏「土佐日記全注釈」(昭42)

補1 「県居蔵書目録」は佐佐木信綱氏「賀茂真淵と本居宣長」所収。

補2 影面の古今集尊重を真淵との関係で考えたが、それとともに①真淵入門以前に二条派歌学を学んだこと②後年冷泉家に入門したことも重視しなければならないであろう。

追記 「百人一首歌のころ」池田本について

岡山大学付属図書館池田文庫本(略して「池田本」と呼ぶ)は、表紙は「百人一首謡の意」内題は「百人一首歌のころ」である。序の上方に「本池田家蔵書」の印がある。表紙に付けた紙に④「百人一首謡の意 一冊 増上寺大僧正御自筆之御手紙ニ而此哥書被遣之 宝暦十庚辰年八月五日」⑤(別筆)「出処不分明 継政公御遺物 明治廿八年十月調」とある。増上寺大僧正は、続采藻編に歌1首が載っている、県門の定月であろう。この付け紙によれば、影面の序の日付けから実に78日後に、定月から、岡山池田家の隠居空山継政(元祿13~安永5)に贈られたものである。ていねいな写本で、句読点もずつついている。序2丁、本文86丁、1面9行、注は1行約25字。序と本文第1丁とは、1か所語句の上下したほかは国会本と同一であり、行の字詰めも同一である。国会本・東大本との関係は、「(池田本・国会本)対(東大本)」「(池田本)対(国会本・東大本)」の対立があり、その異文の内容から見て、池田本系→国会本系→東大本系の順に修正せられたものと思われる。p8引用の「わかいほは」の歌の注について言えば、池田本・国会本は「哥の部類にて明らけし」とだけであるが、東大本では、引用のように、春の例を引いて説明している。なお、続采藻編の作者鎮子・万世子は「備前侯御室侍女」である。

お わ り に

本稿の資料を集めるに当って便宜を与えていただいた東北大学・東京大学・大阪市立大学・岡山大学の各付属図書館、国立国会図書館、宮内庁書陵部、内閣文庫、東京大学史料編纂所、神宮文庫、金刀比羅宮社務所と金刀比羅宮図書館、刈谷市立図書館、無窮会図書館、高知県立図書館ならびに高知大学付属図書館第一閲覧係長高橋輝臣氏に厚く御礼を申し上げます。

(昭和49年9月30日受理)